

箱崎真隆¹: 報告—第30回日本植生史学会談話会Masataka Hakozaki¹: Report—The 30th forum of the Japanese Association of Historical Botany

第30回日本植生史学会談話会が2009年11月8日・9日に熊本県阿蘇地方で行われた。「阿蘇の草原の歴史を探る」というテーマで、宮縁育夫氏（熊本大学教育学部）・佐々木尚子氏（総合地球環境研究所）・小畑弘己氏（熊本大学埋蔵文化財調査室）の案内のもと阿蘇火山とカルデラの巡検が催された。なお、今回の談話会は、第24回日本植生史学会大会（2009年11月7日・8日、熊本大学）終了後に続けて開催された。

8日は、阿蘇火山の西麓にてテフラ断面の観察、阿蘇カルデラの流出口「立野峡谷」にて北向谷原始林（北向山原生林）の見学が行なわれた。大会終了後、熊本大学工学部からバスで北東へ17 kmほど移動し、最初の見学地である露頭に到着した。ここでは、表層から約4 m堆積した黒ボク土層とその下部に挟まるAT (29 cal ka) とKpfa (草千里ヶ浜降下軽石: 30 cal ka) が露見しており、案内人の宮縁氏より、この層序は約3万年前から草原植生が連続し



図1 北向谷原始林の紅葉。



図2 地獄温泉の泉源である夜峰山の爆裂火口。

ていたことを示していると説明がなされた。次に、阿蘇カルデラの切れ目に位置する北向谷原始林を見学した。原始林と呼ばれる理由は、急峻な険しい地形によって人の影響から守られたためと現地の案内板には記されていた。実際に、峡谷に架かる阿蘇長陽大橋から下を覗くと、高所恐怖症の方であれば卒倒しかねないほど谷底は深かった。原始林は常緑樹を主体とする組成であったが、落葉樹の紅葉が大変鮮やかで、筆者の居住する東北地方ではあまり見られない広葉樹による緑・黄・赤のコントラストが素晴らしかった（図1）。

その晩は、阿蘇中央火口丘群の南西に位置する地獄温泉「清風荘」に宿泊した。清風荘は明治期に建てられたとされる木造の館で、玄関に「地獄温泉」と墨の入った大提灯が下がり、ところどころに古材の転用が見られるなど、歴史を感じさせる趣きに溢れ、今回のテーマにぴったりの宿といえた。宿自慢の露天風呂「すずめの湯」は乳白色の湯で、宮縁氏よりpHは1であると事前に知らされていたが、同じ硫黄泉の青森県八甲田山酸ヶ湯温泉に比べれば刺激は弱く、ゆったりと学会の疲れを癒すことができた。夕食には名物のキジ鍋が出され、肉の旨味がダシになり、旬の野菜と併せて食べると絶品であった。翌朝、筆者は地獄温泉の泉源である夜峰山北側の爆裂火口付近を散策した。数mほどの岩が累々と山をなし、その隙間から蒸気が吹き出す光景は、地獄温泉の名に相応しかった（図2）。

9日は、古坊中、草千里ヶ浜、大観峰など阿蘇カルデラの中央火口丘群から北側リムにかけてを巡った。古坊中は中岳火口西方約1 kmに位置し、その地形と層序には中世の山岳寺院遺跡が認められると小畑氏より説明がなされた。現在の景観は植生も乏しく、飲み水の確保も容易ではなさ



図3 阿蘇カルデラ東方の草原地帯。

そうだが、当時は多数の坊舎や庵室が存在したそうである。それらは約500年前に突然放棄され、その原因は中岳の火山活動とも、秀吉の九州下向による政治的混乱とも考えられているが、未だはっきりしないそうである。荒涼とした大地にも、リンドウやミヤマキリシマ、アセビ、イタドリなどが所々に生育しており、植物を専門とする参加者達を喜ばせた。

次に、烏帽子岳の北斜面に位置する草千里ヶ浜火口を見学した。この火口は、約30 cal kaのプリニー式噴火によって形成され、このときの噴出物が前日に観察したKpfaであると宮縁氏から説明がなされた。草千里ヶ浜展望所からは、前日に見学した立野峡谷や、直線的に連なるカルデラ西方の外輪山が一望でき、あらためて阿蘇カルデラの巨大さを実感させられた。

次の見学地は、カルデラの東側に位置する露頭で、ここではK-Ah (7.3 cal ka) など筆者にも馴染み深い完新世のテフラが観察された。宮縁氏より、最近8000年間は阿蘇火山の活動が比較的穏やかであり、この期間に堆積した黒ボク土層のプラントオパール分析の結果から、この一帯はススキが継続的に優占したことが明らかになったと説明がなされた。さらに宮縁氏は、その優占の維持には人為的な火入れが関与したのではないかと、大胆な仮説を披露したが、考古学や植物学を専門とする参加者からは、人為にしては期間が長すぎるのでは？と疑問の声が相次いだ。また、佐々木氏から、テフラ降下の攪乱強度に応じて、ササかススキの優占が決定するのではないかという生態学的観点からの仮説も紹介され、それに対しても参加者から賛否の意見が出た。地質学や、考古学、植物学など多分野の研究者が集う本学会ならではの一幕であった。露頭の周りには、エノコログサとキンエノコロが自生しており、那須氏（総

研大）がその種子を採集し始めると、いつのまにか多数の参加者が巻き込まれていた。

昼食を道の駅「神楽苑」で済ませ、参加者らは、次の観察地点であるカルデラ北東の露頭へ向かった。2カ所の近接する露頭を続けて巡り、最初の地点では過去6万年間のテフラといくつもの小さな断層を観察し、次の地点では過去5万年間のテフラと、30～13.5 cal kaに空白のある黒ボク土層の層序を観察した。阿蘇火山西麓（前日の最初の地点）における30 cal kaから連続して堆積していた黒ボク土層との産状の違いがはっきりしており、長期にわたる植生の空白域を示唆している点が興味深かった。2つの露頭周辺の丘陵地帯では、牧草の緑と、ススキの銀色が美しいコントラストをなし、それが彼方まで続く絶景が見られた（図3）。

最後の観察地点として、阿蘇カルデラの北側リムに位置する大観峰を訪れた。根子岳と中央火口丘群の連なりが、横たわる涅槃像に見えることから、大観峰と呼ばれると説明がなされた。阿蘇谷に広がる耕作地や街の様子も見られ、阿蘇の火山史と人の営みの歴史を同時に望める場所であった。まさに今回の談話会の終着点に相応しかった。

テフラや、植物化石、遺跡といった多方面からのアプローチによって、阿蘇カルデラの自然史を知ることができ、大変に面白い談話会であった。とくに宮縁氏のテフラの解説は、プリニー式噴火を思わせる勢いであり、阿蘇火山に対する並々ならぬ情熱と愛情が感じられた。今後も阿蘇火山の研究をさらに深めて頂き、また、その魅力を多くの方に伝えて頂きたいものである。案内人の宮縁氏、佐々木氏、小畑氏にはこの場を借りて深く感謝したい。

¹ 〒980-0862 宮城県仙台市青葉区川内12-2 東北大学大学院生命科学研究科